

1940年代仏領インドシナの公共事業政策

—— ドクーの政策と都市・建築 ——

大 田 省 一

1. ドクーの公共事業政策

1-1. ドクー総督の登場

1940年、海軍中將・フランス極東艦隊司令長官ジャン・ドクーがインドシナ総督に就任した。フランス本国がヴィシー政権となって以降は、インドシナではドゴールの自由フランスからの働きかけ、さらに日本の仏印進駐とそれに続く日本の対米英開戦、と周辺情勢が激動しており、このような時期に、彼は本国から遠く離れた極東の植民地インドシナの舵取りをしなくてはならなかった。時局への対応のため、彼は様々な政策を新たに打ち出していく。

仏領インドシナの歴史を振り返ると、ドクーの施政期は、19世紀末、1920年代とならんで公共事業が進展した時期である。19世紀末はいわば植民地の立ち上げの時期であり、ポール・ドゥメール総督の強力なリーダーシップの下に大型公共事業が実行された。1920年代は植民地経済が沸騰した時期で、その経済発展の流れにのったものであった⁽¹⁾。

これらに比して、1940年代は内政外交上の課題が重なり微妙な政治運営が必要とされた時期であり、その意図を反映する手段として公共事業政策が取り上げられた点が見受けられる。常にプロパガンダ的演出とともに事業が語られ、いわば政策の道具として公共事業が有効に意味づけされた時期であった。その

最たるものとして、都市計画事業が進展したのもこの時期である。



図1 ジャン・ドクー

本稿では、ドクー総督の政策を概観しつつ、その意図がかたちを結んだものとして建築・都市がどのような姿をみせたかを検証し、為政者の意思が直接的に都市の具体的なかたちに影を落とした、この時代の実像を明らかにしていきたい。

1-2. 公共事業政策の背景

課題が山積した状況で総督となったドクーが植民地を運営していくために重要だったのは、インドシナでのフランスの権益を保持しつつ、連邦の安全を確保し統率することであった。

実際、ドゴールの自由フランスからの働きかけは各植民地に及び、ドゴール側につくものもでていた。本国からは遠く離れた位置にあるインドシナでは、アジアを覆った日本の脅威といかに向き合うか、ということが問題であった。ペタン政権に忠実なドクーの政策は、本国との紐帯を保ち、ヴィシー政権の国民革命をインドシナの地に誘導することが根幹となっていた。

また、内に向けては、連邦のまとまりを維持していくことが政策運営の要であった。本来別個の国家を寄せ集めた所帯でしかないインドシナの連携を維持していくため、フランスの指導の下にベトナム、カンボジア、ラオスの現地人たちがまとまっていく雰囲気醸成する必要があった。

「フランスのもとに、安南、カンボジア、ラオスの民は暮らしている」と、フランスが家父長的な姿勢をもって現地をまとめていることが主張される⁽²⁾。

文明化の使命を持ったフランスが植民地を導くという伝統的な考えに基づき、植民地開発の政治性がより前面に出されるようになる。

「この半世紀のあいだ、公教育、公衆衛生、交通手段、農業水利、また稲作地への援助など、あらゆる分野において、インドシナでは十分な努力が絶え間なく行われてきた。一般大衆の生活をよりよくするため、またその結果として、彼らをさらにフランスにひきつけることだけがその目的であった⁽³⁾。」

民生向上が統治に寄与し、フランスへの連帯を強化することにつながるという考えが、ここに明確に述べられている。教育普及、現地文化の尊重などがそのソフト面の施策とすれば、様々な設備を強化する公共事業の推進は、ハード面での施策であった。

「学校、病院、産院。これらは寛容で人間的なフランスのかたちある恩恵である⁽⁴⁾。」

ここで、各種施設をつくる公共事業は現地人政策に結び付けられて語られるようになる。現地人懐柔とフランスの影響力の行使の二面を、巧みに使い分けが必要であったドクーにとって、特に公共事業は、フランスによる文明化の使命に則り、この二つの政治上の課題を同時に克服するカードともなった。「80年間のフランスの努力」ということばが、植民地化以来のインドシナの文明化を表す標語として、度々持ち出されるようになる。彼の施策には、公共事業を積極的に行うことによって、内政上の課題を克服しようとした点が見受けられる。

本国においても、公共事業は特別の位置づけがなされていた。宣伝相ジャン・ジロドゥーは、次のようにいっている。

「大開発事業 (grand travaux) は、多くの労働力を用いることのみで定義づけられるのではなく、つぎ込まれる資材や資金によってでもない。国家全体の関心を要求し、精神的な協働を必要とし、一時的で熱情的な一体性をつくりだし、民族の性質を表現するようなものによってである⁽⁵⁾。」

国家統一の表徴としての役割が期待され、国民革命の中で高い精神的な意味を与えられていた公共事業は、インドシナでも重要な施策として受け取られていたのである。

1-3. 公共事業政策の特徴

ドクーがこの分野で力を注いだものとして挙げているのは、農業水利、道路、橋梁、海洋および河川港湾、大学学術機関の設立、慈善援助、行政官庁・住居・保養地区・市政建築物の建設等である。

インドシナの根幹をなす稲作農業を振興するために、農業水利では、人口過剰地域である紅河デルタ開発が進められた他、主要稲作地帯であるメコンデルタ、カンボジアにおいて運河開鑿が進展した。土木技術を駆使した大規模な水利施設が奥深い自然景観の中に立ち上がる姿は、まさにフランスの力を見せつけるものである。

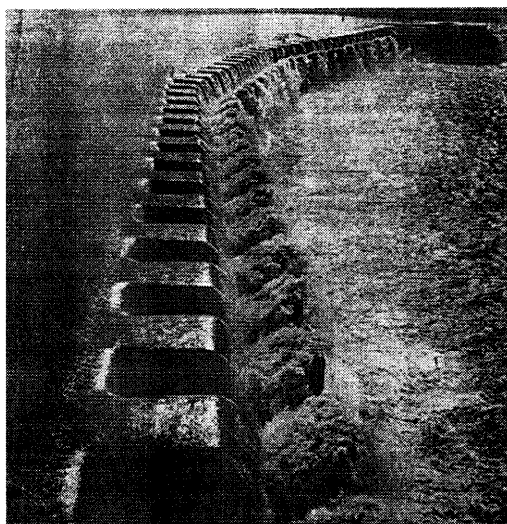


図2 バイトゥオン・ダム

また、交通網整備にも力をいれており、道路建設も進められた。不便なままだった辺境にも道路を通すことに力が注がれている。ドクーは、交通網の整備の効用として、役人・技術者など人的交流が容易になるため行政通達・技術が地方に浸透しやすくなること、道路交通が進展して開拓地との交通も可能となること、そして地方がブロック化するのを防ぎ、辺境地区との繋が

りをつくっていける点を挙げている。

このように公共事業政策においては、地方振興による国土の均衡発展が目指されたが、また同時に、産業基盤整備、都市の美化もその主たる目的とみなさ

れていた。

「公共事業というものは、もっとも現地人の目につくものなので、特に重要だった⁽⁶⁾。」

とドクーが述懐しているように、近代土木・建設技術を駆使して具象的な成果を残していく公共事業は、民生向上に直結し、フランスの力を目に見えるかたちで誇示するには絶好のものであった。そうして、より多くの現地人にフランスの力を誇示する舞台として、都市の整備は重要視されていった。

1-4. 都市計画委員会設置

植民地のなかでの地方振興を掲げる一方、都市は近代化の精華を示す舞台として、その整備に力が注がれた。大衆の目を意識したドクーにとって、日々多くの人が集い、様々な活動の場となる都市は、自身の政策を現前化する舞台として特に重要視された。都市の表層を、いかに自分の色としていくか、ということが、彼の重要な関心であった。ドクーは、近代モロッコ建設の立役者であるリョーテを敬慕しており、リョーテ同様に都市を近代化することが、重要政策のひとつとされたのである。

この意図を政策的に実現するために、ドクーは総督府の組織の改変を行い、総督直轄の部署として「都市計画中央委員会」を設置した⁽⁷⁾。

実は、この種の部局がインドシナにつくられるのは、このときが初めてではない。1923年、モーリス・ロン総督のときに「公共建築中央委員会」が設置され、当時の連邦各州の主要都市の都市計画を一手に行っていた⁽⁸⁾。但しこの委員会は1928年から30年にかけての制度変更で、連邦政府直轄のかたちを止め、各州の公共事業局の下に置かれることとなった⁽⁹⁾。これは、個別性・地域性が強い都市開発事業をより土地に密着したかたちで行うようにしたものともいえるが、一方では管轄部局が格下げされて一步後退したともいえる。この背景としては、都市計画関係者間の対立があった。公共建築中央委員会は、パリより

大物建築家を招聘するための受け皿としてつくられたものであり、都市計画の美的な面を強調するそのやり方には、実地に植民地開発の現場に携わっていた現業部局から反対の声が挙がっていたのである⁽¹⁰⁾。この制度変更は、「本国エリート建築家」の帰朝ののちに行われたことであり、現業官僚たちが都市計画を自分たちが掌握できるように制度変更したものと捉えることができる。

とはいえ、都市計画は、ダム、道路、鉄道など他の大開発事業と同様、国土の開発の観点からも依然として重要視されていた。大衆の視覚に訴えることができ、都市空間を権力でコントロールするための手法であることが、重要な点であった。ドクーの政策により中央での統括が行われた際、すでに各地では専門家が業務についていた。彼の施策は、その活動をバックアップすることとなり、その指揮下に成果が花開くこととなる。

都市計画は住民の生活の場を対象とするものであるため、その行く先は住民、とりわけ現地人住民へと向けられていく。

「私の目的は、フランスとインドシナの二つの文明を、混同することなしに調和して配置し、この二者に、衛生と快適さをさらに与えていくことだ⁽¹¹⁾。」

都市計画の目的について述べたドクーのこの言にみられるように、都市計画は現地人政策や衛生政策の面でも重要な役割を担ったのである。

「都市計画においては、国家が近代生活のリズムと姿勢を確固たらしむものとして、その手法の組み合わせがみられるのである⁽¹²⁾。」

ジロドゥーのこの言では、都市計画は国家が住民を管理する方策として、近代性を発揮する場としての意味があたえられていた。都市という舞台に政策を映し出すことは、為政者の大きな関心となっていた。都市計画には、それを実行する手法として、重要な意義が見出されていたのである。

さらに、大規模な公共事業の精神的効用を述べた際、彼は続けて、都市計画の分野ではフランスが世界をリードしていたことに言及している。人心に大きくアピールし、しかもフランスの優越を誇示できるこの分野は、植民地の運営

には格好の道具となりえたのである。

2. 都市空間の変容

2-1. 都市につくられた施設

都市計画事業以外の個々の政策も、都市空間にフィジカルに影響を及ぼしている。ドクーの施策が、都市の様相をどのように変えていったのだろうか。

都市空間は、国民革命の普及のため、プロパガンダのための空間へと変貌する。都市の目立つ場所にはペタン元帥の肖像・標語が掲示され、街の様相を変させていた。また、ハノイ・サイゴンなどの中心街には宣撫活動のための「情報センター」が設営された。現地文化については、特にフランス・西洋とのつながりの中での発展の軌跡が強調された。ベトナム語のアルファベット表記を考案した宣教師アレクサンドロ・ド・ロードの顕彰碑の建立などが、その実例である。ドクーはまた、フランスによるインドシナ開発の成果を広く喧伝するために、1941年に「ハノイ見本市」、1942年に「サイゴン博覧会」を開催した。都市を売り出すためのこの手法は、19世紀以来の為政者の常套手段とも

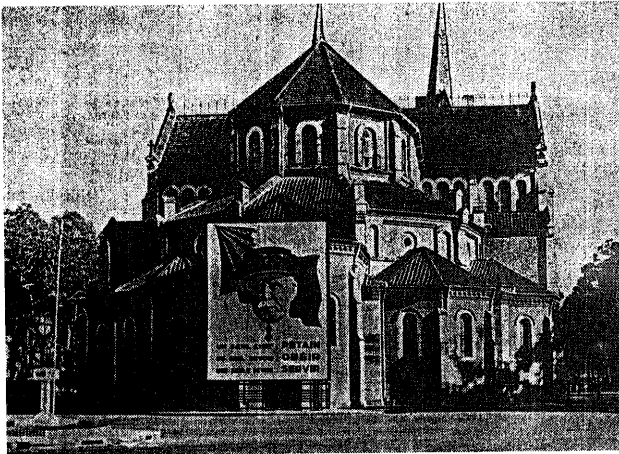


図3 サイゴン大聖堂
とペタンの肖像

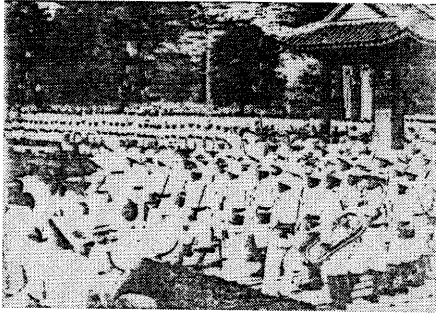


図4 (上), 5 (右)
アレクサンドロ・ド・ロード顕彰碑の除幕式

いうべきものであった。

また、スポーツ・青年活動を振興することも、インドシナをフランスへとなびかせる有効な方法と考えられた。健康・健全なイメージの分野だけに、その背後にある意図を浸透させるには好都合なものであった。またこの政策は、本国での国民革命でも重要視された事項であった。フランスへの愛国心をスポーツという道具で広めるため、総督府に「スポーツ青年委員会」をつくって、具体的な活動を実行していった⁽¹³⁾。インドシナの各都市では、スタジアム・競技場、プールなどの整備が進行していった。このような大規模施設が相次いで建設されたことで、大衆が集い、マスゲームを行う場が作りだされた。各都市にてスポーツ大会を開催し、インドシナ青年の体力・健康増進に努めるとともに、併せてフランスへの忠心をも織り交ぜていった。スポーツ大会には、ペタン元帥のポートレートの前での儀礼式典が執り行われ、ジャンヌダルク祭でのマス・ゲームには愛国心の直裁な表現が見られる。マスゲームの行進は、軍のパレードの隠喩である。スポーツゲームは、あくまでプロパガンダ活動の一環として行われたのである。

思いがけない早い効果が表れた、とドクーが述懐しているが、フランスの旗の下にインドシナの青年が集う様子は、視覚的には為政者を満足させるに十分

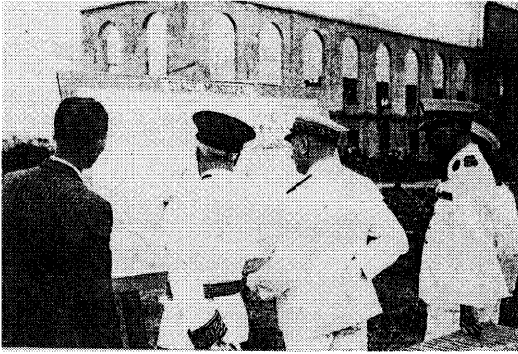


図6 ナムディン競技場建設
現場のドクー

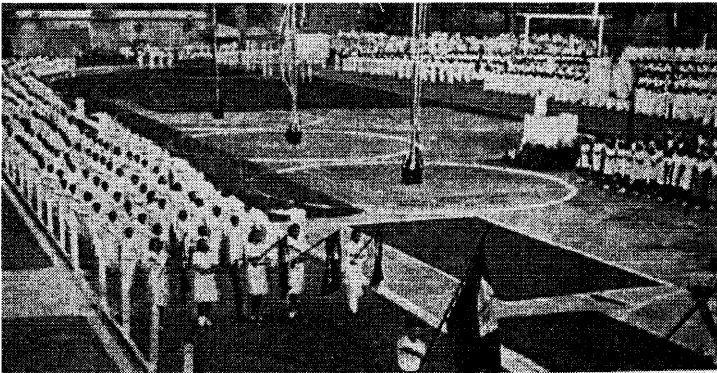


図7 ジャンヌダルク祭

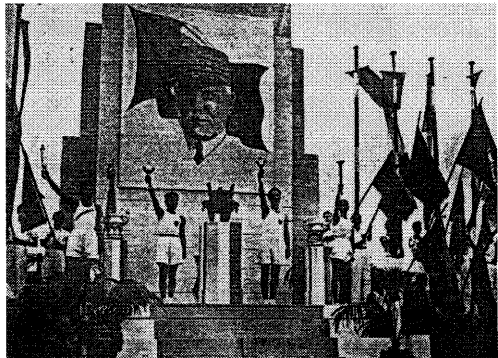


図8 スポーツ式典での
ペタンの肖像

なものがあったようだ。

現地人政策として教育の振興を掲げたドクーにとって、スポーツ振興は教育

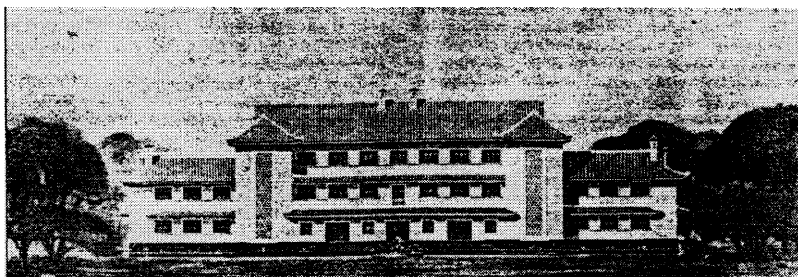


図9 ハノイ大学都市寄宿舍

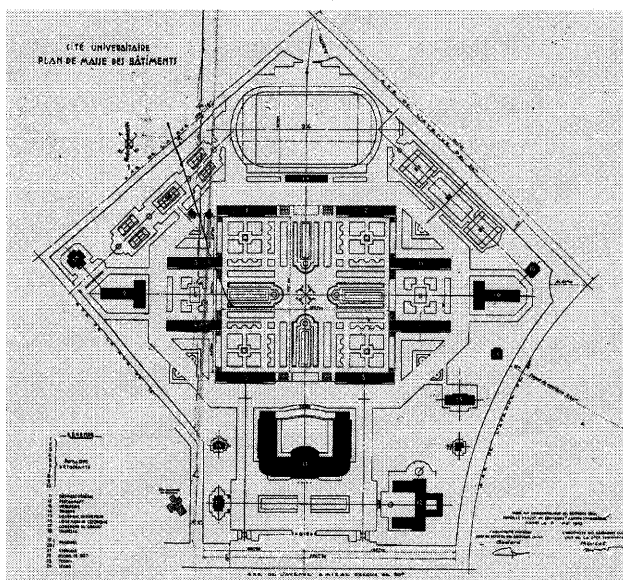


図10 ハノイ大学都市計画図

の成果でもあったが、また一方で、彼は高等教育の充実に力も注いだ。自らの息のかかった現地人エリートを育成することは、植民地運営を思い通りに行う上で必要なことであった。現地人に栄達の道を示し、優秀な人間がそこを目指せば、反仏を唱えるものも減少する。そのための環境づくりに努力していることを示す必要があった。

都市は高等教育機関が立地する場としても重要であり、特にハノイにはインドシナ唯一の大学が存在していた。これを強化するために「大学都市」が建設された⁽¹⁴⁾。これは、ハノイにおいては最大規模の都市開発となり、既存市街地の南部に建設されたその建築群は、ドクーの治世を記念する新都心の中心となるべきものであった。大学都市では、校舎を新築して新しい学部をつくるのはもとより、寄宿舎地区をつくり、連邦の地方部からの学生が就学しやすい環境が整えられた。連邦の均衡した発展を目指す観点から、この大学都市は、地方の教育振興へも結びつくものであった。

ドクーはまた、連邦全土にわたる高等教育ネットワークの設立にも着手しており、その好例が美術学校の整備である。ハノイの高等美術学校を中心に、コーチシナではサイゴンを取り巻くようにザーディン、ビエンホア、トゥードウモットに芸術学校が立地、カンボジアではプノンペンに同じく芸術学校があった。ドクーは、この種の教育機関が存在していなかったラオスに着目し、コン島に芸術学校を設立した。これら学校は、クメール、ラオなど伝統芸術の模様・装飾などの特性を保持し、また近代的手法により再編する役割を果たした。

ドクーにとっての美術とは、現地人の手仕事に基づくものであり、むしろ工芸と呼んだ方が当てはまる。工芸品は、日常生活で実際に使われるものであり、産業振興にもつながるものである。現地経済の発展にも寄与し、現地文化の振興、さらに職芸村が多く農村部に立地していたため、農村の振興にも直結するものであった。ハノイの高等美術学校の改組による「工芸学校」の新設に、ドクーの工芸への指向が端的に表れているといえよう。

同様に、美術学校の改組により誕生したのが、「建築学校」である⁽¹⁵⁾。美術からの工芸と建築の分離拡充は、この2つの分野をドクーが重要視したことの証左といえ、またその有用性をより明確にする結果となった。

とはいえ、彼は絵画、彫刻などの「純粋な」美術を軽視していたわけではなく、むしろ重視していた。ハノイで毎年、時にはサイゴンにおいて、国中の芸



図11 ハノイ美術学校
(彫刻科)



図12 美術学校での建築図面
展をみるドクー

術家、とりわけ若いアーティストが作品を発表することができる場として、「サロン」を開催したのである⁽¹⁶⁾。現地人が、これらの場で作品を発表し、目覚ましい進歩を見せた、とドクーはその成果を誇示していた。

ドクーの教育政策は、現地人エリートの育成に偏っており、識字率の向上など教育普及に特に関心があったわけではない。そのためこの政策が残した痕跡は、高等教育機関が立地する場所（多くは大都市）のみに限られることとなり、都市部の優越を示すことにもつながっていった。

教育とともに、公衆衛生の推進は、民生向上にも役立ち、西洋文明による植民地の近代化の好事例でもあった。入植以来、常に植民地統治の命題になっているこの問題について、ドクー統治期にも多くの成果が出ている。衛生概念が

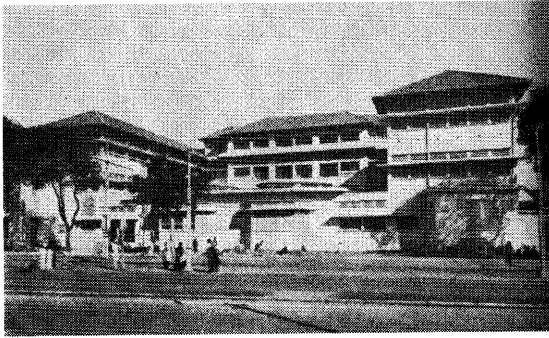


図13 サイゴン総合病院

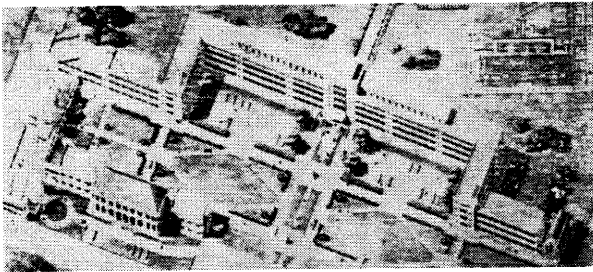


図14 グラル病院改築案

都市の相貌を変えていったのだ。

都市レベルの問題としては、増大する現地人住民の住宅問題が大きくなっていた。すでに1930年代から公的住宅供給のしくみがつくられていたインドシナでは、社会政策として低所得者層向けの住宅供給も開始されていた。ハノイでの「バン・ド・サーブル」住区がその例である。ドクーの統治下においては、同様プロジェクトがサイゴンにおいて実現した。この「茅屋村」プロジェクトは、衛生局の指導の下、住宅地区を市内に複数建設するもので、ハノイの例を参照しつつもさらに大規模な計画となっている。これは、都市ならではの不良住宅地区の改善のためのものであり、下層市民を救済するということでエリート政策とは反対の方向を向いているが、舞台はやはり大都市部であった。

他方、都市内の衛生施設の整備、医療機関の整備も進展した。ハノイではルネ・ロバン病院、サイゴン市内では、病院の改築・新設が相次いだ。グラル病

院の改築、サン・ポール病院、ラルン・ボネール現地人病院、サイゴン総合病院など、大型の総合病院が整備されていった。住民レベルが実際の受益者層となるため、これら病院拡充政策は現地人懐柔政策としては最大の効果があったといえるだろう。

大衆の指導、大衆の煽動が新たな政策手段となったこの時期は、都市はその舞台として大きな役割を担った。都市には様々な施設が建てられ、その様相を変化させていった。ドクーの諸政策は、都市の表層に確固たる刻印を残していたのである。

また、スタジアム、高等教育機関、大型病院など、近代的施設はいつも都市に立地したため、現地人がその近代性の恩恵を受けるために都市を目指す動きを助長した可能性も指摘でき、国民革命の原則である地方振興策の一方で、都市の優越を強調する方向に政策が作用した点も認められる。

2-2. 建築の近代化

ドクーの政策により各種施設が都市部に新設・増補され、都市の相貌を変えていったが、そこで建てられた建築物そのものにも、共通した特徴がみられた。公共事業の中では、都市をいかに近代化するか、ということが重要視されていたが、視覚的効果を重視する観点から、建築は一樣にモダニズムの表現を纏って登場した。都市をモダニズム建築で飾っていくことが、開発・近代化の代名詞ともなっていた。

当時、モダニズム建築はヨーロッパではすでに一般的なものとなっており、機能主義を体現したそのシルエットは、「近代化」の象徴ともいえるものであった⁽¹⁷⁾。しかも、フランスはその運動の震源地である。社会的有用性や共同精神の発露など、前述のような建築の持つ意味合いに加えて、モダニズム建築には新たな価値が存在していた。フランスの栄光による植民地の開発を、目に見えるかたちで表すには格好のシンボルであった。

こうして、新たなモダニズム建築が建ち並んでいったのだが、ドクーはそれだけでは満足しなかった。既存の公共建造物にも、次々と改造の手を加えていったのである⁽¹⁸⁾。これらは19世紀末の植民地建設期のものが殆どであったため、ドクーにとっては時代遅れのものでしかなかった。各種設備が更新されたのはもちろん、近代化を表象させるために豊かな装飾を剥ぎ落とし、わざわざ直線的な、モダニズム的な造形に壁面を改変させた。このように既存の様式建築にまで手を加えることは、いかに建築の表層に意味を持たせていたか、ということの証左であり、またその行為がいかに急進的に行われたかを表すものでもある。反面、あまりに表層にこだわったために、建築プランにおいてモダニズム的な表現⁽¹⁹⁾は継承されず、相変わらずの古典的プランニングが支配的であり、植民地でのモダニズムの受容が皮相的なものに終わってしまったことを示している。ドクーは、モダニズム建築の精神にまでは目が向かず、都市の表層部のみを目新しくしただけの、いわば書割的な都市をつくったに留まったといえる。

ただし、為政者がこれほど建築表現にこだわったのは特記に値する事項である⁽²⁰⁾。美的な成果の提示、社会的有用性、また植民地の団結へとつながる共同精神の発露。ドクーが植民地統治において重要視したこれらの要目を、すべて満たしていたのが建築である。建築学校の設立の際、その卒業生には本国の

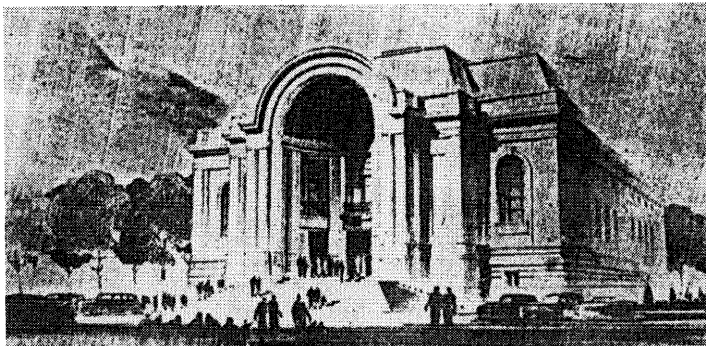


図15 サイゴン劇場近代化案

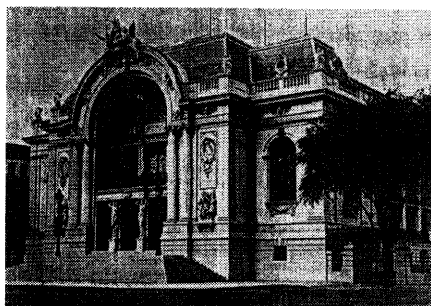


図16 サイゴン劇場（改造前）



図17 同（改造後）

学校卒と同様の資格を与えることとし、現地建築家育成に大きな道を切り開いたのも、その期待の表れであろう。彼が自身の政策で建築の役割を重要視したのは、このような理由に拠るものといえる。

3. 都市計画の実際

3-1. サイゴン改造

3-1-1. 前夜—ピノーのサイゴン論

インドシナでの都市計画の中でも、連邦最大の都市サイゴンの改造には目だたて力が注がれた。経済のダイナミズムを背景に、大都市への道を歩んでいたこの都市をさらに未来志向的に華々しく整備することが目指された。インドシナの近代性を表象させる意思が、そこには明確に見出される。

サイゴンは、1931年には隣接するチョロンとともに連合都市域となり、総人口40万人を数えた。20年代のフランス人建築家エルネスト・エブラールの都市計画以降も、この都市は発展を続けた。都市の規模が大きくなるに従って都市問題も生じてきていた。都市の運営が命題として出てくる40年代には、新たな都市計画プランも提出される。

その間にサイゴンの都市計画を論じたものとして、ルイ・ジョルジュ・ピノー

のものがある⁽²¹⁾。彼がこの都市について考えていたことは、その後のプランで取り上げられた点も多い。インドシナで実地のプランナーとして活躍していた彼がみたサイゴンは、どのような都市であったか。

ピノーがみたサイゴンは、発展を続ける大都市ではあるが、都市計画的に問題が山積した都市だった。地理的・物理的にサイゴンの発展を妨げているものを取り除くことが、対策として考えられていた。フィジカルに都市の障害になっているものとして彼が取り上げたのは、運河、鉄道、軍用地である。

運河は、デルタの物資の集積地としての役割を担うサイゴンには必要不可欠なものであるが、その配置をよく考えないと市街地開発を断絶するものとなってしまう。アヴァランシェ川とカウ・コー運河が具体例で、前者は市街地を北辺から東側に、後者は市街地西側のサイゴンとチョロンのあいだを分断するかたちで流れていた。この対策として彼が考えていたのは、川の暗渠化であった。難なく実行可能で、地区当局で解決可能だろう、と述べている。

軍用地は、海軍の占領地として出発したサイゴンが当初より抱える要素であるが、開港から80年が経っていた当時においても、依然として市街地中心部に広大な面積を占めていた。当然都市の発展の上でも障害になるが、ことが軍事関連であるだけに多くの関連した問題が存在する。いざ移転するとなっても広大な用地を用意しなくてはいけない。ピノーも、「後日最適の解決がなされるべきで、急ぐものではない」としている。あるいは、なかなか簡単に手がつけられる問題ではない、ということか。

ピノーが、解決すべき最大の問題としていたのが、鉄道であった。線路が市内を横断し、市街地を分断していることが、サイゴンにとっての大きな都市計画上の問題とされた。

しかし鉄道もまた、都市にとっては重要な基幹施設である。物資の集散地ではなおのことそうである。

「好ましい解決法がなさそうなので、どんな計画も不可能である」などと自

身のレポートの中で述べているが、両立する問題の解決法は、この時点では示されていない。

さらに、物流拠点・工業地区として考えられていたカインホイ地区へ向けて、鉄道の延長が当時計画されていた。ピノーにとっては、この計画は現状をさらに悪化させるだけのものであったが、そのような路線が運輸面では必要なことも事実である。

「このデリケートな問題には、どんな解決法が適しているかまず調べる必要がある。」

対抗策が浮かばない以上、やはり、どんな問題解決法があるか、現地調査に立ち返る必要があった。

以上、フィジカルな都市の障害に対処する上で、都市計画家として彼が提示した課題は、配置計画、衛生、交通、の3つの事柄であった。

道路、鉄道、水上交通路、港湾など交通条件、また自然条件、地価から必要な用地を考慮すべきとした。交通問題の要求を叶えながらも、鉄道、運河の適切な配置が求められていた。また、ゾーニングによって用途地区計画を考慮し、欧州人と現地人の区別も引き続き実行すべきとした。特に市街地のスプロールには対策を講じるべきで、じわじわと市街地が周辺を「油の染み込むように」侵食し、幹線道路沿いにだらだらと伸びていく状況に歯止めが必要と考えていた。ピノーにとって、整然とグリッド状街路が並ぶサイゴン中心部は「秩序」の場で、スプロール地区は「混沌」の場であった。

その混沌の場とされたサイゴン・チョロンの中間部は、伝染病の温床であり、環境悪化が深刻な地であった。このような地区の状況を改善することが、都市計画のもっとも緊急の課題とされた。流入人口の増加による粗悪な住宅地が蔓延し、下水道の未整備により排泄物処理にも手が回っていなかった。

「いかに重要な仕事まっているかを理解しなくてははいけない」といい、衛生問題が都市計画の最重要課題と認識されていた。

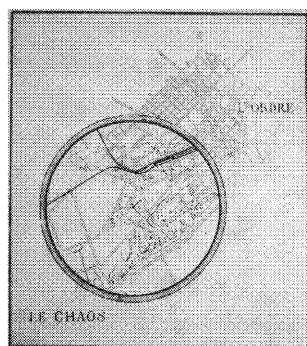


図18 サイゴンの分析図

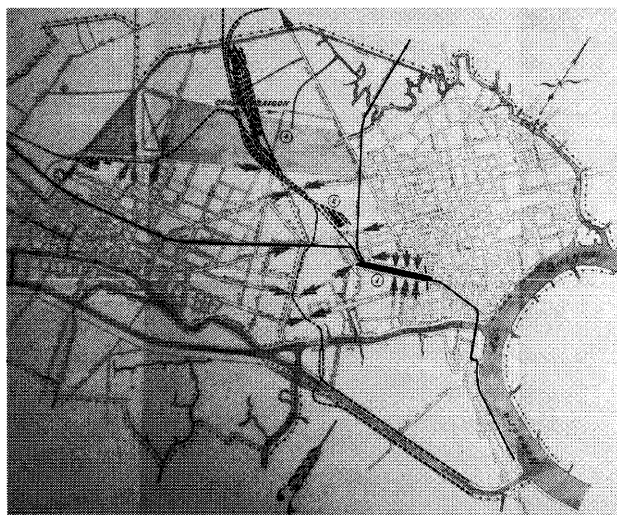


図19 サイゴン計画図

ピノーは、そもそも都市をどのようにとらえていたのか。

「都市にはさまざまな要素がある。(都市プランは)均質なものではなく、機能的なものを構築するのが適当である。」

「都市の各要素を統一するのではなく、上手に組み合わせることが、問われている。」

彼は都市を、ある機能を持った部分部分が有機的に集合したものと考えており、その配置・計画を考慮するプランナーの重要性を訴えていた。

その計画立案のために、いたずらに開発を先行させるのではなく、都市の基礎資料をつくるべきである、と事前調査の必要性を説いた。それは、アンケート、統計、地図、地理資料、あらゆる種類の情報で、都市計画家には必要なものであった。

「都市計画の仕事の質は、実態調査の丁寧さと正確さによっている。」

「この後にサイゴン・チョロンの構成がわかるだろう。」

実務者としてインドシナの都市を見続けてきた彼の見出した都市問題は、それだけ現実を確実に反映していたといえよう。

一方で、彼はビスタを効かせた都市美を実現することも、また都市計画の重要な仕事と考えていた。サイゴンの市庁舎、市劇場、駅とその各々の前にのびる街路、さらにインドシナ総督官邸と、ノロドム通りの緑豊かな景観は、最も評価されていた。

このような都市の物理的空間をみる彼の視点は、サイゴンと周辺部を、秩序と混沌に二分する発想にもつながっているのである。

3-1-2. 都市計画／都市のイメージ

1940年代になって、都市計画中央委員会アンリ・セルッティ・マオリの指導の下、サイゴンの都市プランが立案された。セルッティはこの委員会の長としてインドシナ全体の都市計画を統括する役割があり、彼の下でピグネールがサイゴン計画の担当をした。ピノーはハノイの都市計画を担当している。

サイゴン計画では50年後の想定人口を100万人とし、鉄道駅の移転、現地人低所得者層のための住宅地、新港建設、地方との連絡道路等が検討されている⁽²²⁾。商業地区は、新旅客駅まで展開させる計画となった。チョロンでは、やはり旅客駅を移転させ、現駅地区との間を結ぶ「マレシャル・ペタン（ペタン元帥）通り」を新設する予定だった。

都心の再開発のため、軍用地との用地交換、街路の延長、さらに既存街路を



図20 サイゴン計画図

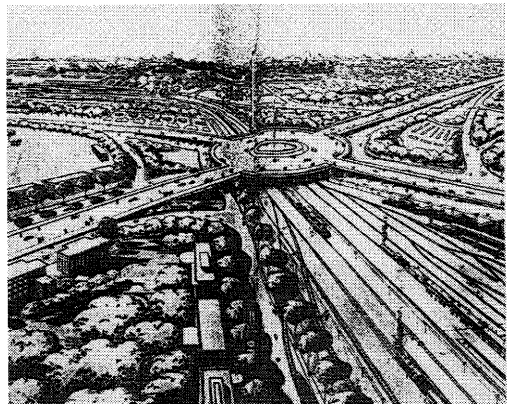


図21 サイゴン計画図

接続して混雑を解消するために、市庁舎を取り壊してシャルネル通りをタベル通りまで延長する案もあった。代わりの新市庁舎は、現駅移転後の敷地に、前面広場を拡張して高層ビル化することが計画された。さらにその背後には新中央市場が予定された。

以上のような大型の施設建設が予定されていたが、それぞれ配置計画にも配

慮されている。新市庁舎前広場は既存の中央市場と旅客駅が面しているロータリーを拡大してつくられることになり、新駅までの街路もこの広場を基点とすることから、都市空間の基軸がより強調されたかたちとなった。この結果として、ビスタの効いたバロック的都市空間⁽²³⁾が、既存のものを上回る規模でつくりだされる予定であった。他の都市が、個別建築物の新築・増築で都市空間を演出しようとしたことに比べ、サイゴンでは都市空間を視覚的に統一した演出とすることが考えられていた。計画案のドローイングでは、スカイラインが揃った中層ビルが建ち並び、その向こうに高層ビルが聳えている。立体交差の巨大ロータリーに自動車が行き交う姿は、明日の大都市の夢を体現しているかのようなのである。まさに未来都市を想わせる具体的イメージが多く提出されたことも、大都市サイゴンの都市計画の特徴的な点である。都市の未来像を提示することそのものが、プロパガンダだったのである。

3-1-3. 鉄道駅の移転

市街地発展の邪魔者として槍玉に挙げられている鉄道路線だが、その対策はすでに講じられていた。

「サイゴン周辺の鉄道整備」計画は、1936年にすでに裁可されており、旅客駅、貨物駅、機関区の3つを整備することになっていた⁽²⁴⁾。ヴェルダン通りの延長部である植民地公路1号とアヴァランシェ川との間の土地に、貨物駅と機関区の用地が取られた。1936年末には工事が始められた。事業は3段階の予定とされ、貨物駅の建設・開業、機関区の建設・開業、旧貨物施設・機関区の取り壊しと新駅の一部建設、であった。新設備が共用開始になるまで、旧来の設備を利用する方針であった。1939年には貨物駅が完成し、翌1940年1月には開業した。機関区は1939年にはまだ工事途中で、その完成は1941年となった。ここまでできたところで、当初計画の工事は延期され、第3段階に進むことはなく、旅客駅は着工されていなかった。これは、新駅の場所について、意見の

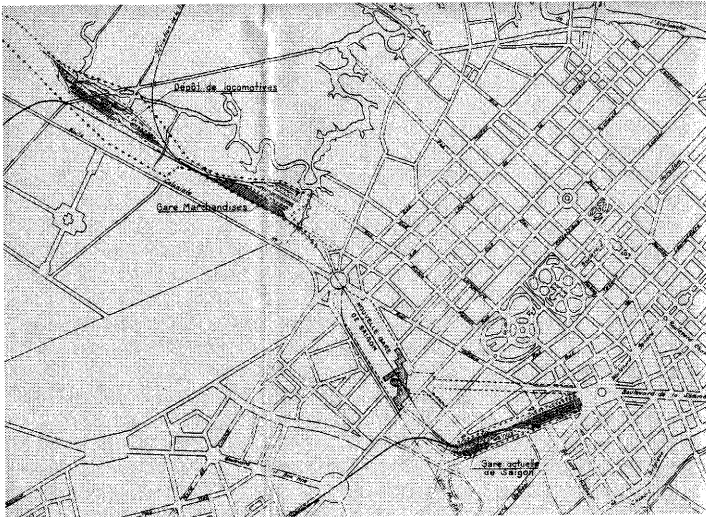


図22 サイゴン鉄道駅計画図

不一致があったためである。しかし、ドクーの指示によりまとめられた都市プランの中で、駅の位置決定がなされた。貨物駅と現駅の間に敷地がとられ、鉄道駅は市の中心部から後退することになり、線路による市街地の分断も幾分解消する予定であった。新駅に向けてドゥ・ラ・ソム通りを延長して港から駅前まで伸びる通りを新設し、ビスタの効いた都市景観が演出される予定であったのは前述の通りである。

3-1-4. 港湾・運河網の計画

河川港の宿命として、サイゴン港は水深が浅く大型船舶が寄港するには不向きであった。そのため、新港をつくることが考えられていた⁽²⁵⁾。サイゴン川が合流するニューバー川に大規模港湾施設を建設するというもので、以下の内容であった；

- ・大型船舶が並んで横付けできる埠頭と、それに十分な水深を備えていること。

- ・川の蛇行部の外辺、この場合は右岸に接岸岸壁をつくるようにすること。
- ・新港をチョロンの米穀倉庫を連絡する運河をつくり、ジャンク船による運搬を可能にすること。
- ・接岸岸壁の後背部に、工業用地や近代港湾に必要な設備をつくる用地を確保すること。

この新港はニャーベ川岸に8 kmにわたって用地をとり、北側を走る地方道路14号線と川岸の間が用地とされた。サイゴン川とニャーベ川の分岐点あたりにはドック・修理工場が置かれ、倉庫はプランテーション産品であるゴムの輸出用倉庫、トンキンからのセメント、石炭の貯蔵庫が設置されることになっていた。新港と既存市街地との連絡には、陸路では、用地境界にもなっている地方道14号線を高規格道路に改築して、カインホイ地区を通してサイゴン中心部との主要連絡道とし、鉄道も延長する予定であった。新港のほぼ中央を流れるザック・ドイ川から、サイゴン方向へ、全長6100mの連絡運河を開削、チョロン方向へザック・カット川と連絡する運河と、その途中から分岐してドゥブルモン運河に連結してチョロン中心部に近い辺りへつなぐ連絡運河を建設する予定であった。

ドクーは、この新港計画に熱心で、「海洋港湾の改良と整備の問題は、無関心ではいられなかった。」と述べている⁽²⁶⁾。

サイゴンでの河川交通の増加が新港湾建設の主たる理由ではあるが、他に、「日本が岸壁の主要部分に沿って存在していることによる重大な困難」というものを挙げている⁽²⁷⁾。日本の存在感がサイゴン港でも増大しており、それを嫌気してフランスの威光を示せる大規模な港湾を望んでいたのだ。ニャーベ新港の建設のため、総督命令で土地収用もすでに行われ⁽²⁸⁾、プランは実行に移されていた。

この新港建設は、既存の市街地の規模から考えるとたいへん広範囲で大規模なもので、一都市の計画を超えた地方計画のレベルのものであったといえよう。し

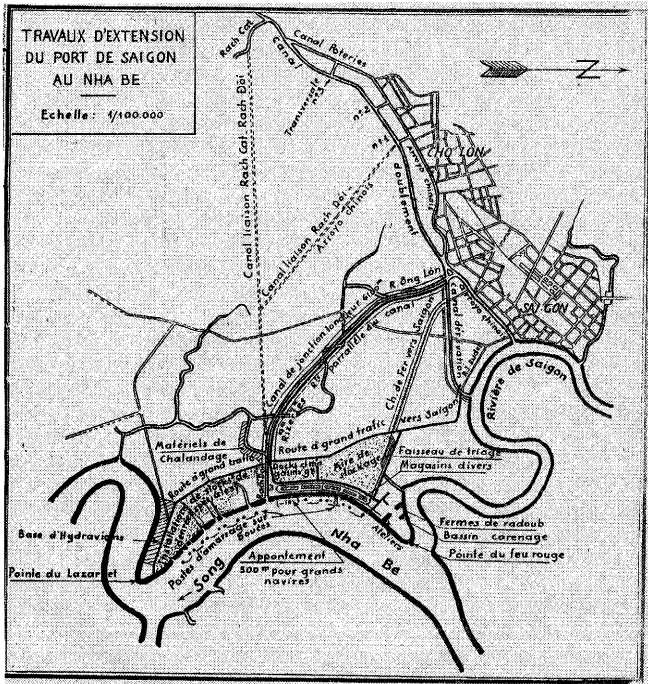


図23 サイゴン新港計画図

かし、果たしてこれほど大きな港が必要であったかは疑問を投げかけざるをえない。

3-1-5. 衛生・現地人・都市

サイゴン・チョロンの、当時の最も深刻な都市問題は、住民増加による不良住宅地区の増大、またそれによる衛生状態の悪化であった。2万件のスラムに12～14万の人が暮らしている、という報告もある。

この解決策として、スラム住民を収容するために公的住宅供給を行うことが考えられ、市衛生局局長で医師のエリボーが指導にあたり、排水、通風、衛生状態に配慮した住宅を建設することになった。木造住宅の団地が4ヶ所計画さ



図24 サイゴン茅屋村

れ、まずはフートー地区が建設された。30haの土地に、1400件余りの住戸が並ぶ、一大住宅地区ができあがった。

これは、先例としてハノイの低所得者層向け住宅地建設に倣ったもので⁽²⁹⁾、さらに規模を大きくして実現している。この「サイゴン茅屋村」では、華僑

が多いこの地域の特性も考慮し、ベトナム人と広東人を分住させ、住戸タイプも独立棟、連続棟、店舗併設タイプなど、住民のライフスタイル・生業に適合するようにされた。ローコストの住宅は簡易な構法で建設できるよう設計され、その建設には住民自身があたり建設労働力の問題も同時に解決することを狙った。また、市場、商店、集会所、寺院など現地人の生活に欠かせない施設の他、広場、運動場、公衆シャワー、学校、産院、郵便局、警察署、劇場といった、近代的な都市生活を演出する施設も用意された。このように、単にスラム住民を収容するというものではなく、健康で文化的な生活を営めるように配慮された、様々なアイデアを盛り込んだ意欲的なプロジェクトであった⁽³⁰⁾。

他計画地についても、タン・ミー・アンに40haの用地を取得するなど、プランが立案され一部実現へと向かったが、時局がその完成を待つには至らなかった⁽³¹⁾。

3-1-6. 計画の行方

このようなサイゴンにインポーズされた計画、それはしばしば誇張された夢であったかもしれないが、それだけこのインドシナ最大の都市のポテンシャルが期待を集めていたといえよう。都市計画中の個別の事業は、30年代から準備

されていたことも多く、その予備的活動が40年代に総合的にまとめ上げられ、都市計画・全市のプランとして立案されている。サイゴン計画の立案過程は、1920年代から40年代にかけての、インドシナでの都市計画政策の制度面の流れを反映したものといえる。

サイゴンの計画は、同時期に立案されたハノイの計画と比しても、具体的な施設、産業基盤の拡充が強調されている。経済の発展のための基盤づくりは当然重要視されるべきであるが、インドシナ経済界を牛耳るサイゴン財閥には歓迎されるものとなったであろう⁽³²⁾。サイゴンの開発計画は、インドシナ最大の都市に住む一般大衆へのアピールはもとより、彼ら経済的実力者の歓心を買うためのものでもあった。

3-2. サイゴン博覧会

3-2-1. 博覧会の概要

1942年12月19日に開幕した「サイゴン博覧会 la Foire Exposition de Saigon」は、ドクー総督の意を承けて、インドシナ経済の中心地サイゴンにおいて連邦の産業、政府の活動を宣撫する目的で、43年2月20日までの会期で開催された⁽³³⁾。この前年、1941年にハノイにて「ハノイ見本市 la Foire de Hanoi」が開かれており⁽³⁴⁾、この成功を受けて、より規模を大きくして催されたものであった。「パンを、娯楽を！」という古代ローマの文句が、この博覧会の紹介記事⁽³⁵⁾に引用されたように、緊張が高まる周辺情勢の中、インドシナの民衆の目を戦時状況から逸らして、束の間の享楽へと向かわせるために大きな役割を果たした。シャスロー・ローバ通り、ヴェルダン通り、タペール通りに囲まれた、総督府に隣接した緑地を会場とした会場は、様々なパビリオンが林立し、都市の中に誕生した新しい都市の趣であった。

パビリオンでは、連邦政府の各部門の出展、様々な製品の展示が行われた。政府部門としては、歴史、地理、海事、軍隊、航空、歩兵部隊、布教、スポー

ツ・青年、美術、フランス極東学院、情報・出版・宣撫・放送、教育、衛生、サイゴン・チョロン、運輸、旅行の各パビリオンが設けられ、産業展示では、農業庁・農業研究所・獣医部のパビリオンを中心に、米、ゴム、スパイス・茶・コーヒー・柑橘類、森林、漁業・海洋研究所、さらに公共事業、鉱山、工業、工芸、商業・金融、の各展示がおこなわれた。さらに、唯一の国外展示として日本館、その他、劇場、ゲームなど娯楽部門が設置された。

ハノイ見本市で、展示物が各省別になっていたことに比べて、このサイゴン博では產品ごとの区分が強調されており、博覧会の原理たるサン・シモン主義に比較的忠実に従った展示方法になっている。そのため地方色は薄められ、インドシナ全体の産業の状況がひとめでわかるような、いわばカタログ的なものを目指したものであった。とはいえただ各部門をパーツのようにばらばらに並べるだけではなく、それらが有機的につながった人体の器官に擬えられ、全体としてインドシナをつくりあげている、ということを具現化することが展示の主たる方針であった⁽³⁶⁾。連邦各国の連帯と産業振興を企図した総督府の意向がそのまま表れているものといえる。さらに、その連帯したインドシナが、フランス本国と緊密な関係になることを提示することが重要視されていた。

出展テーマ自体も、ドクーの意を相当に反映したものとなっている。彼が自らの施政の要諦として挙げていた、現地人教育、美術振興、情報政策、大開発事業、対日関係などは、それぞれパビリオンのテーマとして取り上げられている。

3-2-2. 会場計画

ドクー自身、この博覧会場を都市計画の実験場と考えていた。各展示部門がばらばらにならず、有機的なつながりを持った印象を観客に与えるためにも、会場敷地計画は重要視された。敷地プランは、博覧会の構想に基づいたもので、それ自体が生きたシンボルととらえられていた。会場計画には、総督府建築家

ショーショーンがあたっている。

敷地には、「永遠のフランス」像を中心にしてロータリーをつくり、その円周に沿ってパビリオンが並べられた。これは、フランスが放ち続けている知性とモラルの意味を具現化したものとされ、非常に象徴的な意味を持たされたものであった。ロータリーに沿って内側第1周目にはきちんと円環状に配置された同一規模のパビリオンが整然と並べられ、歴史、地理、美術などのテーマ館が配置された。第2周目にはより大規模のパビリオンが配置され、軍事、海事、など総合的テーマのものや複数テーマを集合させたものが設置された。第2周目のこれらパビリオンは中庭を持った変形プランで、中央ロータリー側の壁面は円弧のかたちをしているが、その外縁はロータリーの支配を脱した個別の造形となり、その外側のパビリオンと楕円形広場や小ロータリーをはさんで、小グループを形成するようになっていた。全体的に、なだらかなカーブを描いた道路に沿って、ランドスケープを考慮した美的なプランが演出された。

このように円形を中心に視覚的な原理を用いて会場全体を設計したことは、博覧会のコンセプトが秩序立ったかたちで具現化されたものとされた⁽³⁷⁾。すなわち、博覧会を貫くフランスの栄光とインドシナの連帯というテーゼと、サイトプランの幾何学的造形原理とのあいだに符合が見出され、それだけ会場の敷地計画を整然としたかたちで実現することが重要視されていたのである。

最外縁の、通りに近いエリアには飲食ゾーン、遊興施設などが設置された。ツーリズム館がこのエリアの、ヴェルダン通りの入口脇に置かれたのは、山岳少数民族やアンコールの展示を行うこのパビリオンが、入場者の大多数を占めるであろう平地ベトナム人（ベト族）にとってもエキゾチズムの対象であり、アトラクション的な意味合いを期待されていたことであった⁽³⁸⁾。

以上のような、曲線を取り入れたサイトプランの中で、異彩を放っているのが「日本館⁽³⁹⁾」の配置である。ロータリーの外周に位置しながら、他とは違って円周のカーブに従うことなくその支配を打ち破った直線的な矩形プランを基

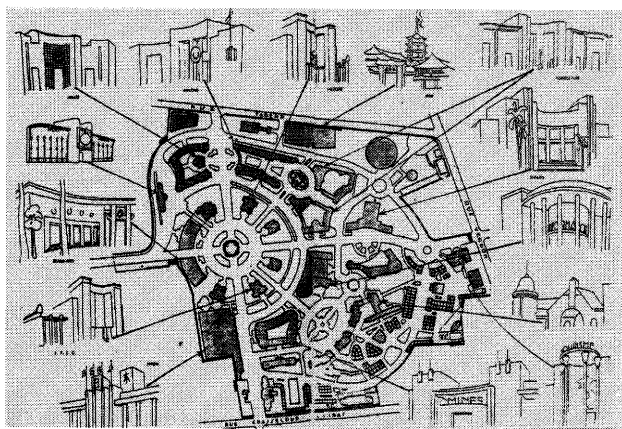


図25 サイゴン博覧会会場プラン

調に構成され、まさに異質なものが挿入されている感があらわれている。唯一の国外からの出展という異質性が顕れているものでもあり、また会場全体を統一するフランスの栄光というテーマから逸脱した存在であることが、パビリオンの配置でひとめで見てとることができるものであった。

3-2-3. パビリオン建築

建築により自らの理念の視覚化をもくろんだドクーにとって、博覧会パビリオンの造形は重要な関心事であった。

「建築家の職能は、インドシナにて高まる好評を得ているが、好ましい天職とすばらしい建築的実現をもってこの国にやってきたのだ。⁽⁴⁰⁾」

このような彼の言に、その想いは端的に表れている。

モダニズムを推進した彼にとって、新しいデザインの建築が、全体の秩序だった計画に従って建ち並んだ様子は、まさに誇らしい景観であった。

「我々は、まず、建築の調和した姿に強い印象を受ける。インドシナで、このような印象を持つのは初めてのことだ。プランを立ち上げる際に、独自のコンセプトが示されている。」

「極東の建築家たちが、チームワークを、また慎ましさをもって働いたことに、私は称賛をおくる。」

現実の都市においても、建築の近代化を推し進めたドクーには、モダニズムによる統一が理想の建築像だったのである。

ドクーの理念では、建築は近代化のシンボルとしてだけではなく、協同精神の表れとしても重要なものであった。

「この経済の首都で、コーチシナで表明されたことは、建築は、協同精神の最も美しいものであり、進歩と幸福なる成功の生成元である、ということだ。」この博覧会のためにインドシナの建築家が動員され、協同して任に当たってその成果を示したことは、自身の考えを表明する道具としてはまたとないものであった。

その協同精神は、また、彼のもうひとつの政策である、フランスとインドシナの連帯という理想の表明としても、格好の事例となった。博覧会の担当となった公共事業局のフランス人建築家たちは、ベトナム人の建築家たちと共同作業を行い、数々のパビリオンの設計をしたのであった。フランスの指導によるインドシナの開発、というドクーの政策の具体例となったのである。

また、パビリオンの装飾には、芸術学校を卒業したインドシナ現地人の芸術家・職人たちの作品が採用されていた。仮設的な材料しか使えないにも拘わらず、アジア的伝統を表す装飾的モチーフをとりいれて作品をつくりあげた彼らのことを、ドクーは「まさにフランス的インドシナ人だ。」として称賛している⁽⁴¹⁾。

「仮設的な材料」とは、戦争による物資不足に悩まされていたインドシナの実況の謂いであり、鉄鋼など重工業資材の入手が困難になってきたため、現地資材の利用をも考えなくてはならない当時の事情を反映したものであった。また「アジア的伝統を表す装飾的モチーフ」は、伝統工芸・職芸を学校教育システム、つまりは総督府の管理下において、その発展により国内産業の振興を期

した彼の政策の具体的な産物であった。

インドシナ現地人青年が、その知性を結集し、フランス趣味と現地の職人技を取り入れて新たなものをつくりだすこと、その理想にかたちを与えたものとして、パビリオン建築は重要な意味を持ったのである。

パビリオンの建築がシンプルな造形となった結果、建築の幾何学的形態と、樹木など植栽の自然造形との対比が、博覧会の会場の景観美として称賛の対象となった。当時の報道では、ル・コルビュジェの建築の定義、「建築は一それが芸術である限り一知的で、規則に適った、すばらしい、光の下でのボリュームの遊びである。」という言をわざわざ引き合いに出して、その美しさを強調した⁽⁴²⁾。

具体例として、「美の殿堂」としてつくられた美術パビリオンをみると、その建築は白いシンプルな造形で、日光の下にそのボリュームが際立つものであった。中央ロータリーの内円に、3つのホールを占めたという事実は、この博覧会でいかに「美術」というものが大きな役割を期待されていたかが判る。全体構成は、ハノイ高等美術学校の学長で、彫刻家のジョンシェールがあたった。インドシナ各地にある芸術学校の作品が、学校ごとに展示され、ジョンシェール自身も女性頭部像を出展している。

パビリオン建築は、ベトナム寺院の屋根など直接的な引用から、在地建築で使われる文様をパターン化して壁全体に使うなどモダンデザインの手法を用いたものまで、伝統文化をベースにした装飾を一身に纏った。かたや、列柱を備えたファサードなど、西洋古典的な基本構成の名残を感じさせるデザインでまとめられている。建築本体のデザインと壁面装飾とは明らかに分離しており、本家モダニズムの理念からは遠い存在となってしまっている。この建築はジョンシェールの手掛けたものであった⁽⁴³⁾。建築そのものも、大開発事業パビリオンに建築をテーマとした一室が設けられ、公共建築や住宅の模型が展示された。

美術パビリオンと一体的につくられた工芸パビリオンでは、連邦各地の工芸

品の展示のみではなく、実際に職人を呼んできて工芸品をつくらせるということもした。

他のパビリオンでは、米のパビリオン、ゴムのパビリオンでは伝統建築を想わせる傾斜屋根を載せたもの、フランス極東学院パビリオンでは美術パビリオンと同様のパターン文様をファサードに使っている建築がつくられた。

基本的にはモダニズムのボリューム操作でデザインされているパビリオン建築群に対して、ゲーム館は伝統建築の屋根、窓、壁面などを直接的にデザインに使っており、異彩を放っている。娯楽性を前面に出すために、他とは敢えて異なったかたちを志向したものと思われるが、その際にベトナム伝統建築の形態を持ち出したのは、設計者の全くのエキゾチズムであった。また、森林パビリオンでは、林業産物として木材を多用しており、展示テーマとパビリオン建築が直結した事例となった。

各パビリオンの展示設営には、極東学院のセデス、衛生パビリオンにはバスツール研究所所員があたるなど、インドシナの知性を総動員するという総督府の目論見はパビリオン展示で実現されたといえる。

さて、日本館では、どのような展示がなされていたのか。ひとときわ広大な面積を占めたこのパビリオンは、これもショーションの設計になり、幾何学的造形によるものだったが、ファサードに列柱廊を用い国旗台を4つも正面中央に設けるなど、威厳に満ちた雰囲気を出したものとなっている。内部展示は、織物、食品、機械、美術など、多くの分野にわたった展示が行われ、インドシナでの存在感を大きくしていた日本の意気込みが表れたものとなっている。日光東照宮や法隆寺の天然色写真など伝統文化の側面とともに、近代都市の景観を写した写真、各種産業機械など、近代化した日本の姿を紹介することに力が注がれていた。美術部門で日本の近代性を表現したものとして、ぶらじ丸の模型が展示されていた。また、歴史部門の展示には、日本とインドシナの過去の交流を扱ったものもあった。



図26 インドシナ青年の像

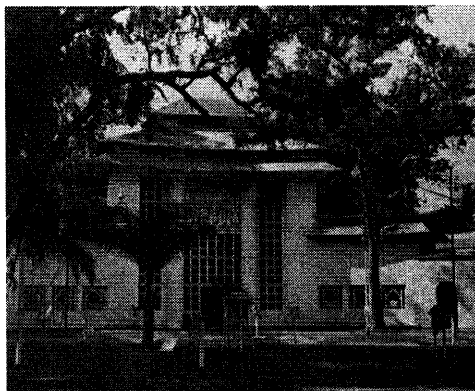


図27 博覧会パヴィリオン（米のパヴィリオン）

その他、当時日本の植民地であった朝鮮・台湾の部門が特設されているのが目をひく。東亜の帝国主義国における、本国と植民地の協力の事例を引き合いにだすことで、フランスとインドシナの連携を正当化する意味合いを帯びたと思われる。



図28 日本館

3-2-4. 博覧会の意味

サイゴン博覧会は、当初予想を超える入場者を集め、開幕2週間の平均で47000人、その間の一日の最高入場者数は6万人を数えたという⁽⁴⁴⁾。当時のサイゴンの人口が17万人程度であったことを考えれば、かなりの集客があったといえる。インドシナ大衆へのプロパガンダがこの博覧会の主目的とされた以上、入場者数を多く集めたことは総督府にとっても好ましいことであった。

現実の都市からは隔絶された仮設空間において、ドクーの意図は存分に発揮

されたといえる。彼の政策を宣伝するための道具として、各パビリオン、特に美術、工芸、スポーツ・青年、情報・宣撫など、現地人統治の要目と考えられていたものには、力が注がれた。また、建築家、工芸職人など、仮設空間をつくるための職能は、それ自体がドクーの政策により育成されたものであり、自身の施策の成果を最大限に活用して、博覧会の空間をつくりあげたのである。白い抽象造形の建築が並ぶイマジネーションの空間。近代建築による植民地の開発を目指したドクーにとって、この空間はモダニズムの実験場、都市計画の実験場としての意味を持っていたのである。

3-3. ダラット計画

インドシナでは多くの主要都市のプランが立ち上げられたが、ダラットのプランには特別な意味合いが持たされた。それは、ここを連邦首都とする構想である。ルイ・ジョルジュ・ピノーが1937年にその構想を発表している⁽⁴⁵⁾。連邦各州の地理的なバランス、またキャンベラ、ワシントン D.C.の例を出して、新首都建設の可能性を示唆していた。この避暑都市には、総督が夏季に長期滞在することが慣例となっており、ベトナム皇帝の別荘もあるなど、インドシナの政治的中心の役割をはたすこともしばしばであった。1943年に都市計画委員会がまとめた計画では、連邦首都のダラット移転を明言こそしていないが、インドシナ総督官邸を中心に総督府の業務棟が大規模に描かれ、実質的に連邦首都機能を担うことも目論まれていた可能性がある。計画では学術センターやカジノも設けられ、連邦の拠点都市にふさわしい開発が指向された。

ドクーの政策でもダラットの重要性は高まっていった。1942年からジャック・ラジスケらにより「シテ・ジャン・ドクー（ジャン・ドクー・シティ）」が計画市街地の北部を占めて造成され、住宅地の開発を推し進めた。総督の名を冠したこの地区は、一部富裕層に限られていた避暑地での生活を都市中間層にもひろめることが目的とされ、簡素なデザインのヴィラが多く建ち並んだ。ドクー

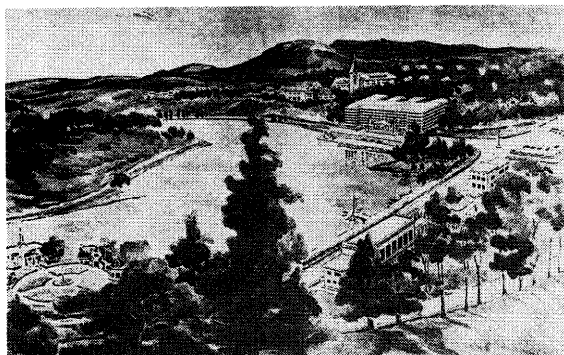


図29 ダラット計画図

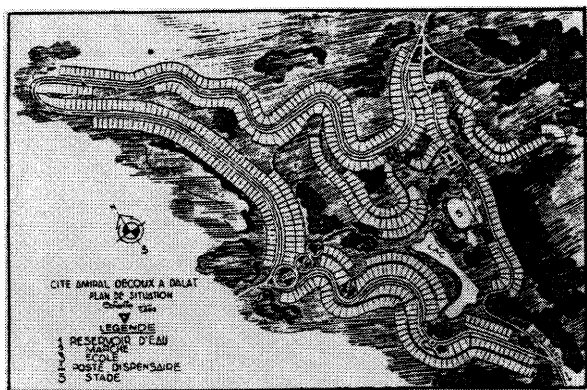


図30 ジャン・ドクー・シティ計画図

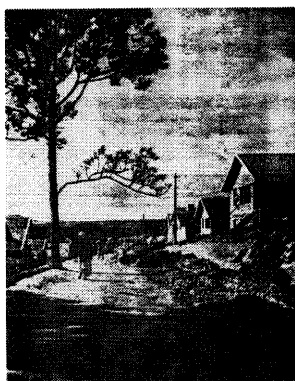


図31 ジャン・ドクー・シティのヴィラ

は、自らの施政期にダラットの市街地面積が倍増したことを殊更に自慢している。それだけ、彼がこの都市にかける期待が大きかったことを示している。

国土地理院、建築学校などの連邦政府施設が実際に移転して、ダラットは連邦の新たな中心としてその重みを増していった。第2次大戦の激化によりインドシナにも空爆の被害がでていたことや、日本軍の駐屯をはじめとした日本の影響力が蔓延するのを当局が嫌ったため、既存の大都市では不都合も増えていた。新たな拠点をつくることに関心が向く理由は十分にあった。風光明媚で気候が穏やかな地を選んで、純粋なフランス的世界を植民地につくりあげることが、夢見られていた。それはまさに、入植以来の彼らの夢が結実した姿であった。

4. おわりに

ドクー治下のインドシナでは、以上のように公共事業を推進する政策の中で、都市計画が大きく進展した。ドクーのリーダーシップにより、都市計画プランナーが力を発揮できる体制がつくりあげられた結果、各都市で華々しく将来像を描いたプランが提示されていった。

ヴィシー政権下の本国では、体制変化によって旧来の組織が入れ替えられ、それまでの官僚的保守主義から実行が躊躇されていた計画が進展し、技術者の夢が一時現実のものとなる現象が起きた⁽⁴⁶⁾。インドシナでは、新規に部局を増設して職務の流れを変え、彼らが動きやすい環境をつくり出したことが、この結果に結びついている。

当時は、ひとつの才能の美的センスが都市をデザインする可能性が、まだひろく信じられていた時代であった。プランナーは、自らのアイディアを実現するために、パトロンを探して国家、体制を越えて動いていた。40年代のインドシナは、プランナーとそれに期待するパトロンとの邂逅によって、少なくとも

夢を描くことだけではできた時代であった。

軍人としての実用主義的な思考からか、ドクーの政策にはモノの占める位置がたいへん大きい。

「私は総督府を、見事に構成された重機械になぞらえていた⁽⁴⁷⁾。」

彼にとっては、植民地統治は必要な武器を揃えて軍艦を指揮する海戦のようなものだったのだろう。海軍提督であった彼にとって、総督府はいわば艦隊であった。建築という「モノ」に期待したドクーの発想法は、そのような彼の個性に基づいたものであろう。そうしてモノをつくりあげる公共事業に力が入れた。都市にさまざまな施設を建ち並べることで、政策の博覧の場がつくりあげられることになる。

機能主義者であり、また視覚効果を重視する観点から、ドクーは建築・都市を最大限に利用しようとした。彼にとっては、建築は「政策のための機械」だったのである。

公共事業には、常に民生向上のためという口上がついてまわったため、戦後も為政者はその成果を誇示し続けた⁽⁴⁸⁾。そうして、その意思はドクー退場の後も、インドシナの地に生き続けることとなるのである⁽⁴⁹⁾。

図版出展

図1, 2 : *Indochine*, n° 47, 1941.

図3 : *Indochine*, n° 149, 1943.

図4 : *Indochine*, n° 41, 1941.

図5, 7, 12, 13, 26, 27: *L'Indochine -supplement a Climat*, n° 181, 1949.

図6, 29 : *Indochine*, n° 164-165, 1943.

図8 : *Indochine*, n° 67-68, 1942.

図9, 10 : *Indochine*, n° 103, 1942.

図11 : *Indochine*, n° 135, 1943.

図14 : *Annales des Travaux Publics de l'Indochine*, n° 4, 1943.

図15, 16 : *Indochine*, n° 160, 1943.

図17 : 筆者

図18, 19 : Institute Francais d'architecture-Archives d'architecture du XXe siecle, 075IFA, Louis Georges Pineau, PINLO 33/03, 'Plan d'aménagement de la region de Saigon-Cholon (Vietnam) 1933-1959'.

図20 : *Indochine*, n° 115, 1942.

図21 : *Indochine*, n° 164-165, 1943.

図22 : *Annales des Travaux Publics de l'Indochine*, n° 3, 1943

図23 : *Indochine*, n° 170, 1943.

図24 : *Indochine*, n° 166, 1943

図25, 28 : *Indochine*, n° 123-124-125, 1943

図30 : *Indochine*, n° 94, 1942.

図31 : *Indochine*, n° 134, 1943.

註

- 1 この時期のインドシナを含めたフランス植民地の都市計画と政治との関係については、以下を参照 : Gwendolyn Wright, *The plitics of design in French colonial urbanism* (Chicago and London: The univetsity of Chicago press, 1991).
- 2 この間の事情については以下の書が詳しい : Eric Jennings, *Vichy sous les tropiques* (Paris: Bernard Grasset, 2004).
- 3 Amiral Decoux, *A la Barre de l'Indochine* (Paris: Librairie Plon, 1950), pp.396-397.
- 4 Jean Decoux, "80ans de Travail francais", *Indochine*, n° 47 (1941), pp.I-XVI.
- 5 Jean Giraudoux, "Hygiene et Urbanisme", *Indochine*, n° 166 (1943), pp.1-3.
- 6 Decoux (1950), *op.cit.*, p.451.
- 7 Création du Service central d'urbanisme et d'architecture, Arrêté du Gouverneur général de l'Indochine, 9 décembre 1940, *Journal Officiel de*

- L'Indochine Francaise* [abrégé ensuite en JOIC], 1940, pp.3220-3221.
- 8 Cr  ation d'un service central des batiment civil de l'Indochine, 1923, LTQG1 (Luu Tru Quoc Gia So 1: ベトナム第1 国家文書館), R.S. du Tonkin, H7.79.157.
 - 9 R  glementant l'am  nagement et l'extension des villes en Indochine, 12 juillet 1928, JOIC 1928, pp.2710-2711., Arr  t   fixantles conditions d'application du d  cret du 12 juillet 1928, sur l'extension et l'am  nagement des villes en Indochine, 20 novembre 1930, JOIC, 1930, pp.4230-4234.
 - 10 公共事業局長のピヤンヌは、都市開発にあたっての実用面を重視し、パリから来たエブラールの美的な面を強調するプランには必ずしも同意してはいなかった。
 - 11 Decoux (1950). *op.cit.*, p.461.
 - 12 Giraudoux, *op.cit.*
 - 13 Decoux (1950). *op.cit.*, p.381.
 - 14 ハノイ大学都市については以下を参照：Concours d'id  e pour la construction d'une cit   universitaire    Hanoi (1941-1944), LTQG1,H7.2129, A.E.Kruze, "Les Travaux de construction de la Cit   Universitaire de Hanoi sont efectivement commenc  s", *Indochine* n   103 (1942), pp.I-VI.
 - 15 Decoux (1950), *Ibid.*, p.403.
 - 16 *Ibid.*, p.407.
 - 17 モダニズム建築では、人間の動きに従った設計をし、建物に与えられた機能を重視することが提唱され、このことから「機能主義建築」とも呼ばれた。
 - 18 サイゴン市劇場、ドラット・ランビアンパレスホテル、ハイフォン商工会議所などがその事例である。
 - 19 モダニズム建築は、直線的で装飾をそぎ落とした機能主義建築を標榜した建築運動であり、その平面計画でも従来の個室を廊下でつなげていく方法ではなく、間仕切りなどでゆるく空間を仕切ってつないでいく方法が、その特徴であった。
 - 20 様式建築にこだわり、都市をヨーロッパ的伝統に接続して重厚さを出そうとした事例は明治日本をはじめ例が多い。同時代では、ヒトラーの計画もちらである。他方、モダニズムを政治的に使った例としてはイタリア・ローマの EUR 地区計画の例などがある。
 - 21 *Rapprt preliminaire sur l'amenagement de la region de Saigon-Cholon*, Institute Fran  ais d'architecture-Archives d'architecture du XXe siecle, 075IFA, Louis Georges Pineau, PINLO 33/03, 1933-1959 Plan d'amenagement de la region de Saigon-Cholon (Vietnam).

- 22 Pugnaire, “Les réalisations-L’Aménagement de la région Saigon-Cholon”, *Indochine*, Oct.(1943), pp.41-43., Ernest Hoeffel(1942), “La région Saigon Cholon”, *Indochine*, n° 115, (1942) pp.V-IX.
- 23 ビスタは、透視図法によって都市空間を設計し、その焦点部分に大型建築物を置く方法。このような目抜き通りをレイアウトしたバロック的都市空間は、フランス都市では古典的手法であり、むしろ保守的なものであった。
- 24 M. Nebut, “Note sur la construction du nouveau dépôt de locomotives de Saigon”, *Annales des Travaux Publics de l’Indochine*, n° 3 (1943), pp.211-214.
- 25 X, “L’extention du port de Saigon”, *Indochine*, n° 170 (1943), pp.8-9.
- 26 Decoux (1950), p.455.
- 27 *Ibid.*
- 28 *Ibid.*, p.456.
- 29 *Construction de village de paillotes*, LTQG1, Mairie Hanoi H.37.4174.
- 30 A. Hérivaux, “Le problème des paollotes dans le Saigon moderne”, *Indochine*, n° 115 (1942), pp.9-10.
A. Hériveaux, “Les agglomération de Paillotes de Saigon-Cholon”, *Indochine*, n° 166 (1943), pp.16-17.
“La cité des paollotes à Saigon-Cholon”, *Indochine*, n° 194 (1944), pp.9-10.
- 31 J. Martinie, “Paillotes et villages de paillotes de la région Saigon-Cholon”, *Bulletin de la Société des études indochinoises*, 1948, pp.145-154.
- 32 ドクーは総督就任時に、彼らからの支持が受けられるかわからないことを理由のひとつとして就任を躊躇した経緯がある。サイゴン財閥は前任者カトルーを支持しており、カトルーが本国からの指示で解任された後に着任したのがドクーであった。(立川京一『第二次世界大戦とフランス領インドシナー「日仏協力」の研究』, 彩流社, 2000年, 266-267頁。)
- 33 “Exposition de Saigon”, *Indochine*, n° 130 (1943), pp.I-IX.
- 34 ハノイ見本市については以下を参照；Paul Munier, “La Foire Exposition de Hanoi”, *Indochine*, n° 67-68 (1941), pp.1-17.
- 35 “Un Flâneur à l’Exposition”, *Indochine*, n° 123-124-125 (1943), pp.54-58.
- 36 “Sens d’une Exposition”, *Ibid.*, pp.2-3.
- 37 “Discours du Vice-Amiral d’Escade Jean Decoux”, *Ibid.*, p.III.
- 38 “L’Indochine, organisme vivant”, *Ibid.*, p.23.
- 39 日本館については以下を参照；“Le Japon”, *Ibid.*, pp.51-58.

- 40 “Discours du Vice-Amiral d'Escade Jean Decoux”, *Ibid.*, pp.I-III.
- 41 *Ibid.*, pp.I-III.
- 42 “Aspect d'une Exposition”, *Ibid.*, p.7.
- 43 “L'Exposition de Saigon”, *Indochine*, n° 155 (1943), p.XII.
- 44 “Aspect d'une Exposition”, p.7.
- 45 L.G.Pineau, *Dalat, Capitale administrative de l'Indochine?* (Hanoi: Imprimerie d'Extrême-Orient, 1937).
- 46 ロバート・O・パクストン著、渡辺和行・剣持久木訳『ヴィシー時代のフランス』、柏書房、2004年、147頁。
- 47 Decoux (1950), *op.cit.*, p.380.
- 48 ドクーの回顧録である Decoux (1950) は、本国帰還以降に弁明的に書かれたものであるが（立川[2000年]）、その中でも公共事業政策を自身の成果として語っている。
- 49 独立以降のサイゴンでは、ゴー・ディン・ジエム政権下にサイゴン都市計画が数次にわたり立案され、国家再建局により集合住宅建設などの公共事業が進められた。ハノイではバディン広場の首都行政地区の造営、プノンペンでもバサック川地区新市街、スポーツ都市の建設など、国家的規模の公共事業が実現した。